

# 古代和歌における「かなし」の語史的研究

前 柴 博 子

## 目次

はじめに

第一章 『万葉集』の「かなし」

第一節 「かなし」の意味分析

第二節 「かなし」を用いた歌の種類

第二章 平安時代以降の「かなし」

第一節 資料について

第二節 『古今和歌集』の「かなし」

第三節 『新古今和歌集』の「かなし」

第四節 『新葉和歌集』の「かなし」

第三章 「かなし」の意味の変遷

第四章 『万葉集』の「かなし」の特色

第五章 今後の課題

おわりに

## はじめに

文学は言葉に始まって言葉に終わる。特に、古典文学の世界を理解する為には、言葉その作品の書かれた時代の生きた言葉として理解する必要がある。

今、本論文のテーマとして数多い言葉の中から「かなし」の一語を取り出し、奈良、平安、鎌倉、南北朝時代における代表的な歌集を資料として、「かなし」の意味分析を中心に考察したいと思う。そして、その中から日本人の心のあり方の歴史を探っていききたい。この研究を、今後自分自身の言葉に対する感覚を磨いていく上で役立てることができればと思ひこのテーマを選んだのである。

## 第一章 『万葉集』の「かなし」

### 第一節 「かなし」の意味分析

奈良時代における「かなし」について考えていくために、わが国現存最古の歌集である『万葉集』を資料としてとりあげることにした。『万葉集』には「かなし」が九十一例あり、その「かなし」の意義に「愛し」「悲し」の二つのあることは周知のことである。

『万葉集』は普通、相聞、挽歌、雑歌の三つの部立から成り、とくに相聞歌の占める位置も大きい。そこで、相聞歌と関連の深いと思われる「かなし」という語について、意味分析を中心として考えたい。

さて、「かなし」の意味を辞書で調べてみると様々な意味が挙げられているが、『万葉集』における「かなし」の意味は大別して次

の二つに分かれるといえる。

① 愛し——いとおしい、(抱きしめたいほど)かわいい。

② 悲し——せつない、(締めつけられるように胸が)苦しい。悲しい。

「かなし」が①の意味で用いられている歌は九十一例中の四十二例であり、②の意味で用いられている歌は、四十九例である。このことから、奈良時代においては、「愛し」「悲し」の両者が、交錯して深められ「愛が深ければ深いほど悲しい」と人々に感じられていたともいえよう。この意味では、この場合は「愛し」、この場合は「悲し」などとはっきり割り切ることではない。しかし、それぞれの歌に用いられている「かなし」は、どちらかの要素を中心に用いられていると言うことはできるのである。

まず、①の意味で用いられている「かなし」は、三つに分類できる。

I、肉親や恋人をいとおしく感じる意

II、肉親や恋人をせつないまでにかわいく感じる意

III、恋人に対する愛の気持ち

このようにI、II、IIIは凡て対人関係の中でのいとおしさをあらわす「かなし」である。万葉の時代に「かなし」は人間関係においての最も深い愛情を表現する大切な言葉として人々が用いていたといつてよからう。

次に、②の意味で用いられている「かなし」について考えたい。悲哀の意をもつ「かなし」は、前にも述べたように四十九例ある。

それらの対象は様々であるが、大別すれば次の三つに分かれる。

① 自分の中の悲しさ

② 対人関係の中での悲しさ

③ その他、悲しいものに触れての悲しさ

以上の三つの項目をつけ分類した。

また、①、②、③の「かなし」が『万葉集』において、どのような悲しみを表現しているのか具体的に示すと次の通りである。

① A 死んだ人のことを思う悲しみ

四例

B 故郷を思う悲しみ

六例

C かなわぬ恋への悲しみ

二例

D 自分が情けないと感じる悲しみ

三例

E 心に触れて悲しく思う気持ち

三例

F 自分が実際に聞いている悲しみ

五例

② A 肉親や恋人との別れの悲しみ

十四例

B 実際に見て悲しく思う気持ち

三例

C 対象に触れてしみじみと胸をうつ悲しみ

九例

以上の結果から、悲哀の意をあらわす「かなし」は、①自分の中で感じる場合が最も多いといえる。もちろん、悲しいと感じる原因となる対象は様々であるが、恋人や故郷など本来人が愛しているはずのものと「かなし」は愛情を背景として、強い結びつきにあるといえる。また、対人関係においての「かなし」は、我(自身)と強く結びついている相手へ対する深い思いから発したと考えられる。では次に、その他、悲しいものに触れての悲しさである「かなし」の対象が問題になってくるように思われる。この場合の「かなし」の対象として、分類の結果より考えられることは次の通りである。

● 本来、人が賞讃の意をもって使われる語と一緒に使われている

「かなし」

。畜生（動物・植物等）と結びついた「かなし」

それは無情の物、小さい物へのわびしき、哀しさであり、そうした弱い物への愛情である。

。過去と結びついている「かなし」

過去は、ある意味では「失ったもの」であり、失ったものにはそれを再び求める心が働くと考えられる。求める心には何らかの形でその対象を愛しんでいる心がある。

。孤独と結びついている「かなし」

人間は孤独を意識する時、孤独の悲しみを感ずる。それは心の底で人を求める悲しみである。

。人生と結びつく「かなし」

『万葉集』の中には、人間が生きていく以上、避けられない様な悲しみを詠んだ歌がいくつもある。それは、人間の存在そのものに根ざしている物ともいえよう。その悲しみは単にある出来事を嘆き叫ぶ悲しみとは異なる。だがそれは自らの存在を否定するのではなく、自らを愛し、その存在を哀れむ悲しみだと感じられる。最も複雑な意をもつ「かなし」であると思えてならない。

以上のように、「かなし」の対象は千差万別である。

## 第二節 「かなし」を用いた歌の種類

これまで「かなし」の意味分析について考察してきた。次に重要な問題として、『万葉集』において「かなし」の言葉が用いられている歌の種類をとりあげたい。

伊藤博氏は次のように述べておられる。

「愛し」は巻四・七・九・十八にそれぞれ一例あるだけで東国特有の語であるといつてよいのである（『萬葉集相聞の世界』九六頁）。

私の分類の結果からも「いとおしい」意における「かなし」が、東歌に占める割合が多いことが確認できた。

では、「かなし」という語について東歌を中心として考えたい。

『万葉集』においては、巻十四は「東歌」と言われ、東（アヅマ）という地域の名をもって総括され、国名の明、不明をもって分け各国別に歌を掲げている。国名判明の部として、雑歌五首、相聞歌八十一首、譬喩歌九首、国名不明の部として、雑歌十七首、相聞歌百十五首、譬喩歌五首、防人の歌五首、挽歌一首、合計二百三十八首である。国名判明の部として、相聞歌の占める割合は約八十五％、国名不明の部として、相聞歌の占める割合は約八十％であり、国名判明の部のほうが多いといえる。いずれにしても、東歌には相聞歌の多いことがうなずける。

では、東歌（巻十四）を除いて「かなし」が用いられている歌を挙げてみると次の通りである。但し、恋の歌のみとして歌で用いられている「かなし」の意味をつけ加えることにする。

596 筑紫船いまだも来ねばあらかじめ荒ぶる君を見るが悲しさ（巻

四）

筑紫に向かう君を送る悲しさ

1259 佐伯山卯の花持ちしかなしきが手をし取りてば花は散るとも

（巻七）

いとしいあの児

1612 神さぶと否にはあらず秋草の結びし紐を解くは悲しも(巻八)

結んだ紐を解く悲しさ

2089 天地の……思ひ来し恋を尽くさむ七月の七日の夕はわれも悲しも(巻十)

も(巻十)

彗星の恋を思う七夕の夜の悲しさ

2967 年を経ば見つつ偲へと妹が言ひし衣の縫目見れば悲しも(巻十)

二)

妹が作った衣の縫目を見る悲しさ

3095 朝がらす早くな鳴きそわが背子が朝明の姿見れば悲しも(巻十)

二)

夫の朝出を見送る悲しさ

3115 息の緒にわが息つきし妹すらを人妻なりと聞けば悲しも(巻十)

二)

恋人を人妻と聞く悲しさ

3342 沖つ藻にこやせる君を今日今日と来むと待つらむ妻し悲しも(巻十三)

(巻十三)

夫の帰りを待つ妻の哀れさ

3727 ちり泥の数にもあらぬわれゆゑに思ひわぶらむ妹の悲しき(巻十五)

十五)

妹のいとおしき

4106 大汝……妻子みれば愛しくめぐし……(巻十八)

妻子を見るいとおしき

4333 鶏が鳴く東男の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み(巻二十)

防人の妻との別れの悲しさ

4343 吾ろ旅は旅と思ほど家にして子持ちやすらむわが妻かなしも

(巻二十)

家に残って子どもを持ってやせるであろう私の妻がいとおし

い

4369 筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹ぞ昼も愛しけ(巻二)

十)

4429 うまやなる縄絶つ駒の後ろがへ妹が言ひしを置きて悲しも(巻

二十)

妻を家に置く防人の悲しさ

4432 障へなへぬ命にあれば愛し妹が手枕離れあやに悲しも(巻二)

十)

いと美しい妹の手枕を離れてむしように悲しい

以上十五首中七例が「愛し」、十例が「悲し」である。そのなかで

4369の歌に注目したい。4369の歌の展開は、素朴さと郷土の香りに満ちたお国なまり、朝な夕なの筑波山、そこに咲く百合の花、その花の

ように床でもいとおしかったあの妹、屋間のいまもかわいくてたまらない、となる。国名がはつきり示されて、場所と景物が詠まれている。それは、目に触れた景物(百合の花)をいとぐちに心情を詠

んでいくうちに、「かなし」という語にいきあたって恋情がわいてきたものと思われる。このような展開で詠まれているものが東歌に

は多い。その他に、国名判明の部に相聞歌の占める割合の多いこと

も、そこで用いられている「かなし」が下の句にあり、凡て「愛し」

の意を示すことも注目すべき点であろう。また4432の歌のように上句では「愛し」(いと美しい)の意味で用い、下句では「悲し」(せ

歌にも同じ用い方がみられるので挙げておく。

3466 まかなし寝れば言に出さ寝なへば心の緒ろに乗りてかなしも  
(巻十四)

この歌の意は、「いとおしきに共寝をするとうわさされる。共寝をしないといつも心にかかつてせつなくてならない」となる。まさに相手の女性を激しく思う心の状態を詠んだ表現である。

では、東歌における「かなし」について分類してみる。まず、東歌において「かなし」を用いた歌は二十五首、同一の歌に二度用いられているものが二首と東歌だけで二十七例ある。しかもそのほとんどが「愛し」の意味であり「悲し」に用いているのは三首、その内一首はすでに挙げたように、上句は「愛し」下句は「悲し」である。「かなし」を「愛し」の意に用いている歌二十二首、下句に「かなし」を用いている歌十七首、上句に五首である。さらに、十首の中には、国名判明の部においては六首、国名不明の部の相聞においては、正述心緒のほうで三首、寄物陳思のほうで八首である。具体的に示していくことにする。

1 下句に「かなし」のきているもの

(a) 国名判明の部

3351 筑波嶺に雪かも降るるいなをかもかなしき児ろが布乾さるかも  
筑波嶺に雪↓白い布↓あのいとしい児

3372 相模足の余綾の浜の真砂なす児らは愛しく思はるるかも  
相模路のよろぎの浜のあの美しい砂↓かわいあの子

3373 多摩川にさらす手作りさらさらになにその児のここと悲しき  
多摩川で宮廷に調として納入する手織りの布をさらして働いてる↓なんでこの児がこんななにとおしいのやら

3386 には鳥の葛飾早稲を饗すともその愛しきを外に立てめやも  
葛飾の真間の手児余を連想し、物忌みが嚴重で神以外は家人はすべて外に出されたにもかかわらず、あのいとらしい人を外に立たせておけようか。

3408 新田山嶺には着かなな吾によそり間なる児らしあやに愛しも  
新田山が続いた山々から離れて端にいる↓私と親しいと噂されて離れている児がむしろに愛しい。

3412 上毛野久路保の嶺ろの久受葉がた愛しけ児らにいや離り来も  
黒穂の嶺のクズ葉のつるが別れ別れに地を這う↓いとらしい児にますます遠く離れて来た。

以上の六首は、国のことを詠んだ歌なのでお国じまんのものが中心であって、それを手がかりにして情感的な歌となり、野趣ある生命感あふれたものである。

(b) 国名不明の相聞歌

正述心緒と寄物陳思とに分類した。

(i) 正述心緒の部

3465 3462 あしひきの山沢人の人さにはまなといふ児があやにかなしき

3479 高近錦紐解き放けて寝るが上にあどせろかもとあやにかなしき  
赤見山草刈り除け逢はすがへあらそふ妹しあやに愛しも

これらは、三首とも「愛し」の意である。

(ii) 寄物陳思の部

3517 白雲の絶えにし妹をあぜせろと心に乗りにここば悲しけ  
仲の切れてしまった妹なのに、心にかかってこんななにとおしいのは、どうせよというのだ。

3537 くへ越しに麦食む小馬のはつはつに相見し児らしあやに愛しも

小馬が柵越しに麦をほんの少しかむ↓このことから、ちらつと逢ったあの子への思い

3548 鳴る瀬ろにこつの寄すなすいとのきて愛しき背ろに人さへ寄すも

鳴る瀬に木屑のぎっしり寄せてすき間がない↓とりわけ恋しい私の人

3549 多由比瀉潮満ち渡るいづゆかもかなしき背ろが我がり通はむ

多由比瀉に潮がいっぱいに満ちているどこを通って私のいとおしい人が私のところへ通ってくるのだらうか。

3551 あぢかまの瀉に咲く波平瀬にも紐解くものかなしけを置きて

情熱のわかない人になぜ紐を解きましよう、私のいとおしい人をさしおいて、

3564 小昔ろの浦吹く風をあどすか愛しけ児ろを思ひ過ぎむ

小昔の浦を吹く風が事もなく吹き過ぎる↓いとおしい子を中心にとめないで過ごすことができない。

3576 苗代の子水葱の花を衣に摺り馴るまにまに何か愛しけ

苗代の子水葱の花を衣にすりつけて染め着馴れる↓どうしてこの子がこんなにいとしいのか。

以上の七例が、上句と関連をもって下句につながっている「愛し」である。

東歌以外には「かなし」が下句で用いられ、しかも「愛し」の意である歌は三首しかない。(三七二七・四三三三・四三六九の歌)

それに対し、東歌に十七首用いられているのは、東歌は万葉時代の強烈な恋を表面化している場合が多いことも原因の一つだろう。

2 上句に「かなし」のきているもの

3451 左余都良の岡に粟時きかなしきが駒はたぐとも吾はそと追はじ

大君の命かしくみ愛し妹が手枕離れ夜立ち来のかも

3486 愛し妹を弓束並べ巻きもころをの事とし言はばいや勝たましに

人の児のかなしけ時は浜渚鳥足悩む駒の惜しげくもなし

3577 愛し妹を何処行かめと山昔の背向に寝しく今し悔しも

五首とも「愛し」の意である。東歌以外では、相聞歌に関わりがある「かなし」という語を用いた歌が十五首、その中で「かなし」

が「愛し」の意で用いられた歌は四首と少ない。東歌においては、「かなし」を用いた歌二十五首、その中で「愛し」の意で用いられた歌は二十二首と多い。そして、二十二首の五首を除き「かなし」

は凡て下句に用いられている。それらの「かなし」は、上句の景物と関連をもち恋情を述べている。

3 「悲し」の意を用いられた「かなし」

3556 漕舟の置かればかなし寝つれば人言葉し汝をどかもしむ

締めつけられるように胸が苦しい意

4 上句が「愛し」下句が「悲し」の意

3466 まかなしみ寝れば言に出、さ寝なへば心の緒ろに乗りてかなしも

既に述べた<sup>4432</sup>の歌も同じである。

5 一首中に二度「悲し」の意があるもの

3403 わが恋は現実もかなし草枕多胡の入野の奥もかなしき

私の恋は今も悲しい、多胡の入野の奥深いように、将来も悲しいことだ。

3403 わが恋は現実もかなし草枕多胡の入野の奥もかなしき

私の恋は今も悲しい、多胡の入野の奥深いように、将来も悲しいことだ。

以上、『万葉集』の「かなし」を具体的にとりあげてきた結果、東歌には他の巻に比べて「かなし」の用例が多く、しかも「愛し」の意で用いられているものがほとんどであることがわかった。

「東歌には民謡的な要素が多く、目に触れた景物をそのままに叙していくうちにそれがある語にいきあたって恋情を催すといったものが多いし、従って景物をのべて強烈な恋の具体的行動を露骨に表現している。」

この説に従い、この点から「かなし」を「愛し」（抱きしめたいほどかわいい）の意で用いられていることが、東歌には圧倒的に多いことに納得したい。

『万葉集』の「かなし」は、外見静かなる「かなし」である。

733世の中はかなしきものと知る時しいよますます悲しかりけり

(巻五)

このように、現実の事がらを包括的にとらえて「恋の悲しさ」や「人生への思い」を、洗練された言葉で歌っている。

『万葉集』にみられる「かなし」の傾向は平安、鎌倉時代の『古今和歌集』『新古今和歌集』へと続くのであろうか。以下の章でみてみることにしたい。

## 第二章 平安時代以降の「かなし」

### 第一節 資料について

平安時代以降の「かなし」について奈良時代の『万葉集』と関連させて考察するために、『古今和歌集』『新古今和歌集』『新葉和歌集』を資料としてとりあげることにした。

平安時代の『古今和歌集』は、最初の勅撰和歌集としてのみでな

く、その後の範となった構成や、序文に示される撰者の文学的自覚、歌論の持つ意義も大きい。歌風は、理的、観念的、反省的で、比喩性に富み、自然人事を感情移入によってとらえているのが特色である。そこには、王朝時代の人々の物の見方が強く反映していると見えるだろう。

鎌倉時代に撰集された『新古今和歌集』は、『万葉集』『古今和歌集』とならんで、わが国の代表的な歌集である。歌風は、幽玄と有心とを基調として、麗華、余情的であり、物語的情趣にいろいろれた人生観照の叙情を表現したものが特色といえる。

南北朝時代に撰集された『新葉和歌集』は四季や恋などを技巧的に詠んだ歌が多い。歌風は、生活体験にもとづく素直な抒情も見られるが、全体の基調は平淡美というべきもので、世をかこつ悲痛な歌に特色がある。

以上の歌集における「かなし」について、比較しながら考察していきたいと思う。

### 第二節 『古今和歌集』の「かなし」

『古今和歌集』には「かなし」が二十八例あり、その「かなし」の意義は奈良時代の『万葉集』と同様に「愛し」「悲し」の二つがある。しかし、二十八例中の二十七例が悲哀の意をあらわす「かなし」であり、いとおしい意で用いられた「かなし」は、一〇九六番(巻二十)の東歌に唯一例見受けられるだけである。

まず、『古今和歌集』の「かなし」の大半を成している、悲哀の意で用いられた「かなし」について考えたい。既述したように、悲哀の意をもつ「かなし」は二十七例である。これらも凡て大別すれ

ば、前章における『万葉集』の分類①・②・③の項目にあてはまる。では、「かなし」の対象について具体的にみていきたい。(記号は一章と共通である。但し『万葉集』にみられない意については、新しくつけ加えた。以下の節も、これに従いたい。)

① C かなわぬ恋への悲しみ

二例

G 相手の恋が冷めた悲しみ

三例

H 自分の将来に対する悲しみ

七例

② B 恋人との死別、離別の悲しみ

八例

③ C 何気なくふと感じた悲しみ

七例

以上の結果から、悲哀の意を表す「かなし」は、①自分の中で悲しさが十二例、②対人関係の中で悲しさが八例、③その他、悲しいものに触れての悲しさが七例であり、『万葉集』と同様に、①自分の中で感じる悲しが多いといえる。しかし、奈良時代の「かなし」と比較すると、対象が異なっている点があることに注目したい。

では、「かなし」の対象について考えていくことにする。

①自分の中で悲しさは、『万葉集』と同様に、本来人が愛しているはずのものと愛情を背景として結びついた「かなし」とみることができ。しかし、『古今和歌集』において「かなし」の対象は、愛する人(恋人)であり、『万葉集』に多く詠まれた故郷を思う悲しみを「かなし」で表現した歌は、見受けられなかった。また、自分の将来に対する悲しさや現在の身の上に対する不安を表した「かなし」が平安時代に生まれたことは大きな特徴といえるだろう。

②対人関係の中の悲しさは、死別、離別と二つに分けることができるが、いずれも恋人との別れを歌ったものである。『万葉集』

においては、恋人との別れと共に肉親との別れも「かなし」で表現していたが、『古今和歌集』で対象が恋人と限られた点は、①において「かなし」の対象が故郷にみられなくなったことが関連しているのではないだろうか。

③その他、悲しいものに触れての悲しさは、何気なくふと思った悲しさであり、心に触れた対象(月・鳥など)によって、自らの感情に悲しみという情が感じられたものと思われる。以上が悲哀の意をもつ「かなし」の意味分析である。

では次に、いとおしい意の「かなし」であるが、既述したように『古今和歌集』においては一例のみである。

1096 筑波嶺の峯のみぢ葉おち積り知るも知らぬもなべてかなしも  
(巻二十)

『万葉集』において、四十二例も「いとおしい」意が見受けられただのに対し、東歌に一例のみという結果より、万葉時代の人々にとって「かなし」という言葉の基本に愛があり、愛情はすべての営みの根源であったように思えてならない。では一体「かなし」という言葉は、いつの時代まで「いとおしい」意で用いられたのだろうか。

### 第三節 『新古今和歌集』の「かなし」

『新古今和歌集』には「かなし」が三十七例ある。しかし、奈良・平安時代とは異なり「かなし」は、いとおしい意で用いられなくなった。つまり、三十七例凡てが悲哀の意をあらわす「かなし」なのである。

では、意味分析を中心に考えることにする。『新古今和歌集』の



「かなし」も大別すればこれまでの分類①・②・③の項目にあてはまる。具体的に示しておくことにする。

① C かなわぬ恋への悲しみ 二例

G 相手の恋が冷めた悲しみ 二例

I 老境の嘆きによる悲しみ 四例

J 夢と現実の嘆きによる悲しみ 四例

K 出家に対する悲しみ 二例

L 都の人から孤立した悲しみ 一例

M 迷いから覚めない悲しみ 一例

N 罪に対する悲しみ 一例

② A 肉親や恋人との別れの悲しみ 三例

C 亡き妻の霊に対しての悲しみ 一例

D 亡き人に対する悲しみ 二例

③ D 冬が誘う悲しみ 二例

E 鶴の音が誘う悲しみ 一例

F 秋が誘う悲しみ 九例

G 鐘の音によって実感する悲しみ 二例

以上の結果から、『新古今和歌集』においても奈良・平安時代と同様に、①自分の中での悲しさが多いことが確認できた。では、鎌倉時代における「かなし」の対象に注目してみることとする。

まず、①自分の中での悲しさは、既に示したように八種類に分類できる。この中で『万葉集』『古今和歌集』と重なる分類はC・Gの二つで、いづれも恋に対する悲しみである。したがって、残りの六種類は、鎌倉時代に生まれた「かなし」と考えられる。なかでも、老境の嘆き(696・702・867・1538)や、夢と現実の嘆き(791・792・829・

1789)を「かなし」という言葉で表現した歌が多いことに注目したい。これらの「かなし」は、鎌倉時代の人々の感情、考え方の本質的なものと深い関係を持っていると思えてならないからである。

②対人関係の中での悲しさは、三種類に分類できる。その中の二種類C・D(亡き人に対する悲しみ)は、新しく見受けられた「かなし」の意である。また、『万葉集』において肉親や恋人との別れを「かなし」と表現していたが、『古今和歌集』における対象は恋人だけであった。しかし、鎌倉時代に再び恋人だけでなく、肉親との別れを「かなし」と表現した歌(873離別歌巻九)が目にとまった。

③その他、悲しいものに触れての悲しさは、四種類に分類できる。これらの分類は凡て奈良・平安時代と重ならないが、対象(季節・鐘の音など)に触れて悲しいと感じる心のあり方が、「かなし」の言葉を通して投影されている点からみれば、根本的には同様であると思われる。

#### 第四節 『新葉和歌集』の「かなし」

『新葉和歌集』には「かなし」が十二例ある。これらは凡て、鎌倉時代と同様に悲哀の意を表す「かなし」のみである。しかし、鎌倉時代まで悲哀の「かなし」は、①・②・③と三つに大別できたが、『新葉和歌集』においては、③その他、悲しいものに触れての悲しさを表現した「かなし」が消え、①・②の分類だけとなった。具体的に示すことにする。

① H 自分の将来に対する悲しみ 一例

I 老境の嘆きによる悲しみ

三例

O 身の上に対する悲しみ

二例

P 見れないものに対する悲しみ

二例

② B 恋人との死別・離別の悲しみ

四例

以上の結果が『新葉和歌集』における「かなし」の分類である。

奈良・平安・鎌倉時代と同様に、①自分の中の悲しさが多いといえる。①の意で用いられた「かなし」は四種類に分類できたが、そのうち二種類(O・P)は、南北朝時代に新しくみられた「かなし」である。これらは凡て、対象を通して自分の内面に痛烈な悲しみが湧いてきた結果用いられた「かなし」であろう。O・Pの四首は、いづれも巻十九・哀傷歌に属している。

②対人関係の中での悲しさは、平安時代の『古今和歌集』と同様に、恋人との死別、離別の悲しみを詠んだものだけである。南北朝時代に「かなし」は、愛する人との別れの苦しみを表現するための言葉として用いられていたといえる。

是れ迄の分類で確認できたことは、万葉の時代に、あれほど「いとおしい」意で用いられていた「かなし」が、平安時代には唯一例となり、鎌倉時代以降になると「いとおしい」意が消えてしまい、「かなし」は悲哀の意を表す言葉になってしまったことである。「かなし」の意味変化の跡を辿っていくための分析を通して、私はそこに人間の心の推移を垣間見た思いがしてならなかった。

### 第三章 「かなし」の意味の変遷

本章では、これまで歌集を通して考察してきた「かなし」の大き

な流れを概観してみたい。

奈良時代(『万葉集』)における「かなし」は、いとおしい意(四十二例)と悲哀の意(四十九例)である。数字の上からみても分かるように、奈良時代は「愛し」「悲し」の両者が交錯した形で人々の心のなかに存在していたと思われる。次に、「かなし」の対象についていえることは、「愛し」は凡て対人関係の中のいとおしさを表現したものであるのに対し、「悲し」には自分の中の悲しみも含まれている。この点で相違するように見られるが、「かなし」と感じる対象は人それぞれに異なり、「愛し」と「悲し」は、愛情を背景として自己と強い結びつきにある対象に触れての心の叫びなのである。これには、万葉時代の人々の「かなし」という言葉の基本に愛があり、愛情はすべての営みの根源であったことが大きく影響しているといえる。

平安時代(『古今和歌集』)における「かなし」には、いとおしい意と悲哀の意の両方が見受けられる。しかし、いとおしい意で用いられた「かなし」は、唯一例(一〇九六番巻二十)のみであった。また、「かなし」の対象も奈良時代とは異なり、故郷を思う悲しみを表現したものではなくなり、愛する人(恋人)を対象としたものが大半となった。平安時代の特徴としては、自分の将来に対する悲しさや現在の身の上に対する不安を表す「かなし」が新しく生まれたことである。

鎌倉時代(『新古今和歌集』)における「かなし」は、悲哀の意を表す「かなし」のみとなり、いとおしい意を表す「かなし」は消えてしまった。また、「かなし」の対象については、奈良・平安時代と同様に自分の中の悲しが多い。しかし、老境の嘆きや夢と現

実の嘆きを表現した「かなし」は、鎌倉時代になって見受けられるようになったものである点に注目したい。このことは、鎌倉時代の人々の感情、考え方の本質的なものと深い関係があると思われるが、特に仏教などの無常観が次第に人々の間に浸透するにつれ、対象を客観的に反省的に時間的に眺めるようになったことが影響しているように思えてならない。また、対人関係の中での悲しさの対象であるが、平安時代には見受けられなかった肉親の対象が、鎌倉時代に再び見受けられるようになった。

南北朝時代(『新葉和歌集』)における「かなし」は、鎌倉時代と同様に悲哀の意を表す「かなし」のみである。その「かなし」の対象は、自分の中で感じる悲しみと対人関係の中で感じる悲しみであり、鎌倉時代に多く見受けられた悲しいものに触れての悲しさを表現した「かなし」は消えてしまった。しかし見られないものに対する悲しみを表現した「かなし」が新しく生まれた。このことから、南北朝時代には、対象を通して自分の内面に痛烈な悲しみが湧いてきた結果用いられるようになった「かなし」と、対人関係の中で愛する人との別れの苦しみを表現するために用いられた「かなし」が最も多く使用されていたといえる。

このように、奈良・平安・鎌倉・南北朝時代の「かなし」が含む意味は、対象も様々でありかなりいろいろな意味をもち、幅の広い言葉であったといえる。「かなし」がもつ各々の意味がいかなる時代に、いかなる場で生じ、使用され、又吸収され、消滅していったのかを知ることにより、日本人の心のあり方の歴史を僅かながらであるが探れたような気がしてならなかった。

#### 第四章 『万葉集』の「かなし」の特色

第二章で『万葉集』の「かなし」について意味分析を中心に考えた。本章では『万葉集』における「かなし」の特色について考えた。

「かなし」の意義には、愛憐の意と悲哀の意があることは既に確認できた。しかし、『万葉集』に四十二例も見受けられた愛憐の「かなし」は、平安時代に一例のみとなり鎌倉時代以降は全く用いられなくなった。つまり、愛憐の「かなし」が『万葉集』の東歌に集中的に見られるという点は、大きな特色といえるであろう。では、『万葉集』の東歌における「かなし」について考察してゆきたい。東歌には、悲哀の「かなし」は巻四・巻七・巻九・巻十八にそれぞれ一例あるだけで、「かなし」の大半は愛憐の意である。それは一体「愛し」と「悲し」の違いはどこにあるのだろうか。

「悲し」の情というのは、対象(単に対者ではなく自己自身を含む場合も考えている)に流れる愛心が障礙の意識をもつところに生ずる感情であると思う。これに対して『愛し』の情は障礙の意識をもたないところに生ずる感情であらうか。それでは『愛し』の情はあまりに穏やかであり、弱い。私は『愛』の情というのは対象に流れる愛心が充足の意識をもつところに生ずる感情であると思う。

(「文学探究」第二巻第二号 昭和二十四年三月 二二頁)

このように、中川徳之助氏は述べておられる。『悲し』を「愛心が障礙の意識をもつ」「愛し」を「愛心が充足の意識をもつ」ところに生じる感情であるという点にうなずきたい。しかし、既述し

たように奈良時代においては「愛し」「悲し」の両者が、交錯して深められていた点から考えれば、この二つの感情は常にからみあっているといえる。一見逆の意味に思われる「愛し」「悲し」が、どのような観点からその意味がまとめられるのかをみるために、その対象について次に分析する。

では、東歌における「かなし」の対象を見てゆきたい。

△男が女を「かなし」とみたもの▽

3351 筑波嶺に雪かも降らる否をかかなしき兒ろが布乾さるかも  
(卷十四)

3476 赤見山草根刈り除け逢はずがへあらそふ妹しあやにかなしも  
(卷十四)

3576 苗代の子水葱が花を衣に摺り馴るるまにまたあぜかかなしけ  
(卷十四)

△女が男を「かなし」とみたもの▽

3549 多由比瀉潮満ちわたるいづゆかもわなしき背ろが吾がり通はむ  
(卷十四)

3551 あちかまの瀉に咲く波平瀬にも細解くものかなしけを置きて  
(卷十四)

以上のように、二つに分類することが出来る。これらは、男と女の違いがあるがそれぞれ「かなし」は「愛し」と解釈できる。

では、「かなし」の対象が異性になく自己の心中そのものを述べたものであり「悲し」と解釈できる歌を示しておきたい。

3403 吾が恋は現実もかなし草枕多胡の入野の奥もかなしも(卷十四)

4338 たたみけめ自が磯の離磯の母を離れて行くがかなしき(卷二十)

4429 うまやなる繩絶つ駒の後ろがへ妹が言ひしを置きてかなしも  
(卷二十)

4432 障へなへぬ命にあればかなし妹が手枕離れあやにかなしも(巻二十)

四三三八・四四二九番の歌は、母や妹との離別を悲しむ防人の気持ち「かなし」と詠んだものである。四四三二番の歌は、拒むことが出来ない勅命のために、愛する妹の手枕を離れて行く防人の気持ち、どうしようもない運命の嘆きとして「かなし」に表出されているのだから。

是れ迄みてきた結果より、東歌において「かなし」の対象の殆どは異性(妹・妻)にあるといえる。では、「妹」と「妻」に対する使用状況を示しておく。『万葉集』においては、「妹」六五二例、「妻」一五八例用いられている。ところが、東歌においては一例(妻子)を除き二十二例凡てに「妹」が用いられている。なかでも、「かなし妹」のように「かなし」と共に用いられているものが八例と多い点に注目したい。また、愛憐の「かなし」の対象となる語は、「妹」の他に「こ(児)」「(九例)」「背ろ」「(三例)」のみである。ここで用いられている「こ」は、他に見られる「子供」の意ではなく、「いとおいしいあの娘」の「娘」の意である。つまり、「妹」「娘」「背」は、凡て愛情のこめられた語であるといえよう。これらの点から、東歌の時代的環境を背景に用いられる「かなし」には、「愛憐」「親愛」という何か肉感的性愛的匂いにつきまとうのは当然のことのように思われる。

以上考察した結果より、東歌における「かなし」は、対象(愛す

る相手)を意識し、相手に呼びかけ訴える内面的な自己のあらわれであろうと思われる。

現在では、専ら不幸な状況に接し心が痛むときに用いられる「かなし」が、『万葉集』の東歌においては、自らが最も愛する対象への心の叫びとして用いられている。そこには万葉時代の東人の心が映し出されていると思うのである。

## 第五章 今後の課題

今後の課題として次のようなことが考えられる。

一、「かなし」の意義には、愛憐の意と悲哀の意がある。しかし、愛憐の「かなし」は、平安時代においては一例のみとなり鎌倉時代以降は消えてしまった。では、この「かなし」によって表現したいとおしい意は、どんな言葉を用いて表現されるようになったのだろうか。もっと時代を下って詳しく調べてみたい。

二、「かなし」を意味別に分類する段階で性別における分類もつけ加えて、男と女の「かなし」のうけとめ方の違いについてまとめてみるのも面白いように感じた。

三、「かなし」の意味分析を中心に考察してきたが、他の感情形容詞との関連を深めていき、意味変遷の理由について深く考えていくことが期待される。

以上の点を、今後の研究課題としていきたい。

## おわりに

この論文をおえて「かなし」の三文字の中には、私の予想をはる

かに超えるほどの様々な人間の心が秘められていたことに驚かざるを得なかった。

古代において「かなし」は、強く心に感じた時に、プラスの感情にもマイナスの感情にも同時に使われ得た言葉であった。しかし、次第に一方の意味のみを受け持つようになり「かなし」は、専ら悲哀を表すマイナスの感情を表現する言葉となった。古語の「かなし」から現代の「かなしい」への移り変りは決して断続的なものではない。人間の感情、考え方の本質的なものと深い関係をもっている。

本論文を書くための準備をしている途中で、難しいテーマを選んではしまったと後悔した。だが逆に、簡単に分類することができないほど多様な意味が秘められた「かなし」の言葉とその響きに、私はすっかり魅了されてしまったのである。

現代は書く事の少ない時代であり、言葉への配慮が少なくなり、必ずしも言葉を大切にする傾向にあるとはいえない。ある意味では言葉にとって危険な時期なのかもしれない。しかし、人間が人間らしさを失わない限り、言葉は単なる記号とはならないと信じていたい。今の私は未熟ながら、これまで興味をもっていた感情を表す言葉「かなし」について、私なりに研究できたことに大きな喜びを感じている。私にとって言葉は、無明の世界を渡る橋のように思えてならない。その橋は自らが架けるものである。私は「言葉」という橋を架け、その橋を渡り続けていくために、これからも言葉に対する関心を人一倍持ち続けていきたいと思っている。

## 参考文献

『万葉集一〜四』 高木市之助等校注 岩波書店 昭和59

『萬葉集総索引』 正宗敦夫編 平凡社 昭和49

『萬葉集相聞の世界』 伊藤博著 塙書房 昭和51

『古今和歌集』 日本の古典九 小学館 小沢正夫等校注・訳者 昭和58

『新古今和歌集一〜二』 日本の古典35・36 峯村文人校注・訳者 小学館 昭和58

『新葉和歌集』 塚本哲三編 有朋堂書店 大正15

『文学探究』 第二巻二号 中川徳之助著 昭和24

### 〔評〕

一、全体を通じて「かなし」の語史がよく記述されている。

次の課題として、意味変化の理由づけが残されている。論文中にも記されている通り、そのためには、他の語との関係を見る必要がある。また、「まかなし」「かなしいも」「かなしげ」「かなしさ」など、「かなし」を含む語の生滅の様子を調べることもその手助けとなろう。

一、形容詞、特に「かなし」のごとき感情形容詞の意味記述は非常に難しく、具体的な一例を分類する場合には、「どちらかの要素を中心に用いられていると言いうことはできる」(第一章第一節)といったことにならざるを得ないし、また、そうあるべきであろうと考える。

「どちらの要素が中心か」によって分類可能な観点を、さらに見出して行くことが大切であろう。

一、『万葉集』の「いとおしい」の意での「かなし」の使用は、東歌に集中することを確認し、東歌での「かなし」の語義分析を

厳密に行なった点は、評価される。

次の問題として『万葉集』の中でも、東歌以外では、「いとおしい」という心情をどのように表現したのか。「かなし」以外の語を用いていたとすれば、それはどのような語か、といった点が挙げられよう。

(佐々木 勇)